



渡島・檜山地区小学校児童の国語読解力の実態と問題点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 舟越, 芳男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001362

渡島・檜山地区小学校児童の 国語読解力の実態と問題点

舟 越 芳 男

北海道教育大学函館分校国語教室

Yoshio FUNAKOSHI

The Actual Conditions and Problems of Reading Comprehension of
the Primary School Children in Oshima and Hiyama Districts.

も く じ

§ 1 はじめに	3. 5 論説文の読解
§ 2 調査のねらい	3. 6 語いの理解
§ 3 調査結果の分析	3. 7 以上の結果を通 して
3. 1 説明文の読解	§ 4 読書生活環境
3. 2 随筆文の読解	§ 5 国語学習環境
3. 3 詩の読解	§ 6 おわりに
3. 4 生活文の読解	

§ 1 は じ め に

例年行なわれる文部省の学力テストでは北海道地方は全国でも最下位にランクされている。その原因は多々あるが僻地校の多い事も一因をなしているらしい。北海道には僻地校が実に多い。統計によると大正年代までは全道小学校の80%までが単級、複式であったというし、しかも80%から70%台になるには前後27年もかかっている。昭和の現代でも50%を割っていない。（北海道教育研究所編「北海道の小さな学校」参照）この文化的、経済的、教育的貧困閉鎖地帯が学力の向上を阻んでいるというが果してそうであろうか。僻地の教育にとすれば疑念をもつ現場の教師は「僻地の教育では十分な事は望めない。国語指導にしても漢字の読み書きすら大変」とあきらめともつかぬ嘆息をもらす。僻地児童の学力は果して劣っているのか、劣っているとすればどういう領域か。学力を向上させるきめ手になるものは何か。根本的な問題を今一度われわれは考え直してみなければならぬ。本州地方においては一部農山村児童の優秀性は例えば岐阜県の調査その他でも判明しているようだし、又教育のメッカ・アメリカのように農山村のコミュニティーが都市や町を中心に形成され周辺農家が合理的に結びついて教育上、文化上、交通上の支障を見事に解決しているところもある。またフランスにおいては少数精鋭主義の塾教育の組織が随所に取り入れ、むしろマスプロ的な大都市の学校以上に教育上の成果をあげ、これらの小規模の学級

組織を通して教師と児童との結び付きが教育上の有形無形の陶冶となって人間形成、学力形成に大いに役立っているという。僻地児童の学力向上は物的基盤の上のみ形成されるものでない、とまれ本道の僻地教育にはもつと根本的に探究されなければならぬ面があるようである。わが国語教育研究室では両三年来この問題と取組んで来ているが、ここにその成果の一部を発表する機会を得た。御批正をいただければ幸いと思う次第である。

§ 2 調査のねらい

2.1 読解能力の規定——言語文化の伝承は概ね書きことばによってなされる面が多い。学校教育の場ではこの書きことばを理解することによって文化の伝承を果す。そういう点では読解作業は国語学習では重要な因子である事は論をまたない。しかも日本語は漢字、かな併用の文字組織をとっているために読解に際しては特別な訓練を必要とする。小学校はこの訓練を積む基本的な段階である。さてこの読解能力を規定しようとするれば一般的には次の諸点があげられるであろう。①文字に関する力、②語句に関する力、③文脈をたどる力、④主題をとらえる力、⑤内容を把握する力、⑥文を鑑賞する力、⑦書物を選択する力などであるが学年発達段階における特質を考慮した場合はそれぞれどうなるか。本調査では特に小学校6年生の児童を対象に調査したがその学習内容を学習指導要領では次のようにうたっている。「目標・内容」の項に①読み物の内容と読む目的に応じてそれに適した読み方をする事、②書かれていることの事実と意見を判断して読む事、③文章の組立や叙述に即して正確に読む事、④文章を味わって読む事、⑤要点を抜き出したり、全体を要約したりすること、⑥どんな本がよいかを見分け、よい本をえらぶこと、などの点を示しているが中学校へ進んで批判的に読む力の基礎能力を作る意味で6年生では少なくとも次の諸点はおさえられなければなるまい。①文章の組立や叙述に即して読み取る能力②要点を抜き出したり全体を要約したりする力、③主題意図を把握する力、④作品に対する鑑賞力

以上の点から本調査では説明文、随筆文、詩や歌などの作品群をえらび以下それぞれのねらいを決め問題文を提示して実施した。

2.2 調査のねらい——僻地校だけを特別に抽出して調査しても、地域の体系的学力把握にならないので次のような要領で実施した。

- ① 渡島僻地、桧山僻地、都市近郊、都市地域からそれぞれ学校をえらび、地域による格差がどの位あるか。
- ② 児童の読書生活と読解能力の関連はどうか。
- ③ 国語学習の実情と読解能力のつながり

調査対象学年として特に6年生をえらんだのは1、2年はややもすれば周囲の条件に左右されやすく充分な結果が得られない。3、4年は国語能力が飛躍的に増大するが、かつて「音読における誤りの傾向」で調査済みである。6年は上級学校進学 of 学年でもあり小学校では最も力の充実した時期でもあるので特に正確に調査したかったのである。次に協力を願った学校名を記す。

- ① 渡島僻地校——古部、岩部、上の湯、熊嶺、桜野の各小学校（計31名）
- ② 桧山僻地校——若松、美谷、奥尻、稲穂、球浦、松江の各小学校（計137名）
- ③ 都市近郊校——亀田郡赤川、同桔梗の各小学校（65名）
- ④ 都市校——函館市新川小学校（37名）

総計 270名

§ 3 調査結果の分析

参考のため出来るだけ問題文を提示し、その結果を具体的に述べようと思う。なお問題文は6年生として基礎的読解能力を調査するものに限定し、光文書院発行国語問題集その他を参照して選定した。

3.1 説明文の読解

次の文を読んであとの間に答えなさい。

正倉院^{しょうそう いん}は、いまから約千二百年前に奈良^{なら}の東大寺^{とうだいじ}の境内^{けいだい}に建てられた、たいせつなものを入れる倉庫です。その建物は校倉式（あぜくらしき）といって、三角形の木材をいげたに組合わせた特別の①構造をしています。はば33メートル、おくゆき9.1メートルゆかの高さが2.4メートルもあって、風とおしがよく、品物を②ほぞんするのにはたいそうつごうのよい建物です。この中に入れてあるたくさんの品物は、国の宝物として、むかしから天皇^{てんおう}の封印^{ふういん}がほどこされ、天皇の代理^{だいり}の勅使^{ちよくし}でないといけないことになっています。これらの品物の種類はたいへん多くて、金属工芸品、楽器、武具、日常生活品、文書、③織物、とう器、宗教用具、薬品など、千年も前の生活をそのままあらわしているすばらしいものばかりで、世界じゅうにこれほどみごとにほぞんされているところはないといわれています。

問1 この文は何について書いたものですか。○をつけなさい。

(ア) 正倉院の場所について (イ) 正倉院について (ウ) 正倉院の大きさについて

問2 この文は二つの部分に分けられます。どこで切れ目になりますか。文中に『のしるし』をつけなさい。

問3 段落ごとに小見出しをつけるとしたら、つぎのどれがよいですか。2つえらんで○をつけなさい。

(ア) 東大寺 (イ) 正倉院の歴史 (ウ) たからの山 (エ) 工芸品 (オ) 正倉院の構造
(カ) 正倉院の品物

問4 正倉院の建物についての説明で、中心になることばはつぎのどれですか。○を一つだけつけなさい。

(ア) 千二百年前 (イ) 校倉式 (ウ) ほぞん (エ) 風とおし (以下略)

3.1.1 正倉院についての記述文であるが類似の文は既に二、三の教科書に提出されている。「新しい国語」（東京書籍KK）6年1の単元7「道は続く」（2）「東西文化の交流」。「小学新国語」（光村図書出版KK）6年下単元9「読書の喜び」「正倉院」等であるが殊に後者では本問題文と類似の文が掲載されている。解答結果を次に示そう。

3.1.2 文章全体の主題を決定し（問1）・段落に区切る問題（問2）は割合高い正答率を示し、都市、僻地による差はあまり見られないのに、段落ごとの要旨・要点を読み取る問題や段落小主題の判定（問3・4）および漢字の読み書きの問題になると全体としてかなりの低さが目立つ。なお問3において段落ごとの小見出しをつけるのであるが2つの正解を選ぶことの出来たものが総体的に見て23.7%、1つしか選ぶことの出来ないものが60%とかなりの開きがあるし、ま

付表第1 説明文読解における正答率(百分比)

出題意図	性別	渡島	檜山	近郊	都市	総計					
問1 全体主題の決定	男	62.5	59.9	78.7	75.5	80.5	83.1	93.4	94.5	78.8	78.2
	女	57.1		72.1		86.7		95.5		77.8	
問2 段落の区切りをつかむ	男	87.5	90.9	66.2	71.7	92.7	89.7	86.6	93.3	83.2	86.8
	女	92.9		77.2		86.7		100.0		90.4	
問3 段落ごとの要点を読み取る	2つ正	4.5		25.2		35.2		29.7		23.7	
	1つ正	81.8		51.6		52.1		56.7		60.6	
問4 段落の小主題を判断する	男	12.5	13.6	50.0	47.0	26.8	29.6	60.0	59.5	37.3	37.5
	女	14.3		44.3		33.3		59.1		37.7	
問5 漢字の読み書き	男	57.5	56.1	31.5	33.9	53.6	50.4	32.0	33.7	43.6	43.5
	女	54.7		36.3		47.3		35.4		43.4	

た段落ごとの小主題の判断となるとこれも40%台を下廻っている。両者を通じて無解答のものが16.5%もあったことは聊か問題にならう。段落の区切りを正しくとらえることは文章を理解し、論理的関係や文の構造を正しく把握することにもなり、ひいては文章を正しく効果的に表現する力を養うことになる。この文章は段落相互関係が明確であり、短文でもあるので比較的容易に理解出来るものと思われるが、要はこれ等の関係を結びつける中心語句の把握、理解が充分でない為誤りを犯すもので今後とも充分注意したいところである。

3. 1. 3 次に漢字の読み書きについて述べてみよう。

「構造」「織物」については読みを、「ほぞん」については書き取りを要求したのであるが、全体として渡島56.1、檜山33.9、近郊50.4、都市33.7、平均43.5の正答率を示し、都市が意外に伸びないが目立った。主な誤例は次の通りである。①発音上の誤り—例えば「構造」に対して「こうぞん」「こをぞう」「こうそお」「こぞん」等、②熟語としての読みの不十分なもの—例えば「構造」に対して「こうづくり」③他の熟語を連想しての誤り—例えば「せいぞう」(製造)、「えいぞう」(映像)、「けんぞう」(建造)、「ばいぞう」等、また「織物」に対して「きもの」(着物)、「しなもの」(品物)、「おくりもの」(贈物)、「にもち」(荷物)、「しょくもつ」(食物)、「きぬおりもの」(絹織物)。④類似の字形への類推による誤り—例えば「構造」に対して「よこづくり」(横造り)、「こうどう」(講堂)。「織物」に対して、「絹物」、「ぬいもの」(縫物)など、いずれも語い理解の不充分さが目立った。⑤その他④拗音でないものを拗音に読んでみたり、⑥濁音を清音に読んでみたり、⑦長音を短音に読んでみたりする誤りが多く見られた。ただし方言から来る発音上の誤りは割合少ないと思われるが、これが、常対話や日記、作文などになるとかなり多く出て来るのではないか。漢字指導については充分留意する必要がある。漢字の書き取りについての誤例を示してみると、①字形の不正確な記憶によるもの—「保」②同音、異文字を使うもの—「保尊」③字形の類似によるもの—「保在」④発音上の誤り—「方存」「本存」「法造」「保造」などが目立つ。

3. 2 随筆文の読解

よくこえたサンマをこんろにかけると、まもなく独特の音楽がはじまる。セロのげんでかなでるピッチカート（バイオリン・ギターなどで、ゆみを使わずに、指でげんをはじく演奏のしかた）のように、サンマの油が火の中でうたうと、それは秋たけなわをつげる調べとなり、焼けていくサンマの煙（けむり）がすいじ場ののきをつたわって夕もやの中に流れていくと、それは秋の哀愁（あいしゅう）をえがくいっぶくの絵となるのである。カキ、クリ、マツタケ、そしてサンマ―秋の味覚は楽しい。

問1 「よくこえた」とはどういう意味ですか。

- (ア) よくふとった (イ) よく光った (ウ) よくあらった

問2 「秋たけなわ」とはどういう意味ですか。

- (ア) 秋が近づく (イ) 秋らしい (ウ) 秋のさかり

問3 「うたう」とか「調べる」などのことばを使ったわけ。

- (ア) 音楽に関係のあることばを使って、文の調子をそろえた (イ) 音楽を聞きながらサンマを焼いていたから (ウ) 「歌の調べなど」とひとつづきに使われることばだから

問4 「秋の哀愁をえがくいっぶくの絵となる。」とはどんな意味ですか。

- (ア) サンマを焼く煙が夕もやの中に流れる光景を絵にかいた (イ) 秋の哀愁という題の絵をかいてみたい (ウ) 秋の夕もやの中に流れるサンマを焼く煙に哀愁を感じ、それを絵に見たてた。

3. 2. 1 随筆文の一部であるが、児童の経験に身近な秋の風物を取り上げた薫り高い作品である。比喩的な表現が多いので割合むずかしい文章と思われる。正答率などを次に示そう。

付表第2 随筆文読解における正答率（百分比）

出題意図	正 答					誤 答							
	地 域	渡島	檜山	近郊	都市	総計	地 域						
							誤 答 例	渡島	檜山	近郊	都市	総計	
問1 語句の意味		88.6	66.7	87.3	62.1	76.2	問1	イに○ ウに○	50.0 50.0	26.4 56.6	44.4 55.6	42.8 57.2	40.7 54.8
問2 同 上		41.9	44.0	45.1	48.6	44.9	問2	アに○ イに○	50.0 44.4	36.0 51.7	17.9 74.1	31.5 68.5	33.8 59.6
問3 表現のうまみの理解		41.9	47.8	49.8	54.1	48.4	問3	イに○ ウに○	61.1 38.9	61.4 28.9	61.1 38.9	64.7 35.3	62.1 37.9
問4 情景描写の理解		61.3	57.2	54.9	64.8	59.5	問4	アに○ イに○	83.3 16.7	47.1 33.8	62.5 37.5	53.8 46.2	61.6 38.4

3. 2. 2 随筆文は内容も形式も自由で慣用にとらわれない作品である。感動にまかせて書いたものであるだけに作者の個性がよくあらわれている。その反面作者独特のムードに幻惑されて読み手からいうと主体性が確立しにくい。そういう点は上の表にもはっきりあらわれている。読み手によって感銘する部分や感銘する方向がかなり違っているようである。読解には文章全体の論旨の流れや主題といったものにはつとめて敏感であると共に語句特有のイメージを適確に把握する必要がある。問1の語句の意味は割合よく把握されているようであるが都市部における最低の結果はどうしたものであろう。問2の「秋たけなわ」の語句の持つ意味はかなりむずかしいと思われるが、このようなことばは最近では、新聞やテレビ、ラジオなどのマスコミを通してよく聞かれるのでもっと高い正答率を示してもよさそうと思われる。問3、4は文章表現の特色

や内容、情景が適確に把握されておらなければむずかしい問題であろう。随筆によって自然や人事に対する見方や考え方の示唆が与えられるのでつとめてこれらの作品になれさせる必要がある。なお誤答率の表について一言したいことは、地域別に見た生活環境に対する特色が出ているということである。問1では都市においては(イ)(ロ)ほぼ同数であるのに対して松山では1:2の割合になっている。「よくこえたサンマ」が「よく光った」さらに「よく洗ったサンマ」に類推したとしたならば生活的なおいかにじみ出ているような感じがする。問2「秋たけなわ」を「秋らしい」「秋が近づく」とした例はやはり語いの持つイメージを適確に把握できなかったうらみがある。問3、4に対してはあまり地域の差による違いはなかったが、全体として成績はかんばしくないようである。情趣的味わい、思索的味わいの強い随筆文であればなおさら理解困難であろうと思われる。

3.3 詩の読解

きっぱりと冬がきた
 八つ手の白い花も消え
 いちょうの木もほうきになった
 []ともみこむような冬がきた
 人にいやがられる冬
 草木にそむかれ、虫類にげられる冬がきた
 冬よ
 ぼくに来い、ぼくに来い
 ぼくは冬の力、冬はぼくのえじきだ
 しみとおれ、つきぬけ
 火事を出せ、雪でうずめる
 刃物はばのような冬が来た

問1 []のなかに次のことばのうちどれをいれたらよいのでしょうか。

(ア) ぴちぴち (イ) しんみりと (ロ) きりきりと (エ) さらさらと

問2 「きっぱりと」とはどんなようすをいいますか。

(ア) 寒くなったり、あたたかくなったりしている (イ) いっぺんに、もんくなく寒くなった。

問3 「いちょうの木もほうきになった。」とはどういうことですか。

(ア) 木の葉がかれて竹ぼうきをさかさにしたようになった

(イ) いちょうの木でほうきをつくった

問4 この詩で作者はどういっていますか。

(ア) 冬はいやだ (イ) さあ来いといっている (ロ) 冬はこわい

3.3.1 例文は高村光太郎「道程」中の一編「冬が来た」である。高村光太郎の詩には冬をうたったものがかなり多い。「冬の朝のめざめ」「冬の詩」「深夜の雪」等であるが、この詩は叙情的な作品であり、比喩法や擬人的な手法を味うことができれば6年生の児童にとってさほどむずかしいものではあるまい。

付表第3 詩歌読解における正答率（百分比）

A, 詩 の 読 解						B, 和 歌 の 読 解					
出題意図	地 域					出題意図	地 域				
	渡島	檜山	近郊	都市	総計		渡島	檜山	近郊	都市	総計
問1 適語の挿入 文脈の理解	19.4	22.6	12.7	10.8	18.6	問1 語句の意味	61.3	61.0	47.9	75.7	61.5
問2 語句の解釈	90.3	87.3	90.1	90.1	89.7	問2 指示語の理 解	25.8	34.0	25.4	51.4	34.2
問3 比喩的表現 の理解	80.6	86.8	69.0	97.3	90.5	問3 作者の心理 把握	83.9	77.4	81.7	81.8	81.2
問4 作者の感情 の読み取り	77.4	76.7	69.0	75.5	74.5						

問1は [] の中に㊦「きりぎり」を挿入する文脈理解の問題である。「きりぎり」が冬の冷たさを表現することばとして「もみ込むような」という句と対抗する場面を想定することがむずかしかったのか結果はあまりよくはない。この詩全体のもつ力強さから来る特有のニュアンスをつかみさえすれば問題はないのだが、「学習指導要領」では詩を書くということが要求されているのは5年からであるがもっと早い学年から要求してよいのではないかと、できれば1年生からでも早くはあるまいと思う。小学校6年程度でこの位の詩が理解できないではいかにも心細い。問2語句の解釈、問3比喩的表現の理解は割合よいようである。問4作者の感情の読み取りも或いはむずかしいのではないかと思われたが出来はよいようである。問題4を除いては表現の理解を主眼としているが、このような叙情的な詩から情趣をくみ取るということは困難かもしれぬ。だが児童の生活に即している詩であるならば情景についての裏付け操作や、表現に対する読みの深さがあれば或程度適切な鑑賞力は出てくるものと思う。

3.3.2 小学校6年では短歌はほとんど出て来ない。かりに取り上げられても付随的である。問題文は省略したが石川啄木の「ふるさとのなまりなつかし停車場の人ごみの中にそをききにゆく」について「なまり」の意味、指示語「そ」の判断、および「作者の心情」の理解を主として問うて見た。「なまり」を「友だち」と判断して選択技をえらんだものが5割強をしめていたが、これは「なまり」の次に「なつかし」という述部が来ていたので誤ったものであろう。指示語の意味が僻地よりも都市部の児童によく理解されておったのは文法的な学習や経統的なテスト学習によってよく指導されておった結果であろう。「作者の心情」の理解については都市部と僻地との差はないように思われた。

3.3.3 もともと詩教材のねらいは詩が人間感情の率直な表現であるのだから、その教材を味読、鑑賞することによって共感し豊かな情操を育くみ、人間形成に培えばよいわけである。したがって生きて人間感情をわがものとする真実のことば、表現のうまみに酔うことが必要である。その点文法的な細かな事項の説明や、ことばの類型化をさけ、それぞれ個性に合った鑑賞態度をつくるように心掛けねばなるまい。詩は都市部の児童より感情表現に乏しいといわれる僻地の児童にこそ大いに指導すべき教材と思われる。

3.4 生活文の読解

どこからの帰りだったか、わたくしたちふたりがよく見るわんぱく連に、ゆくえをさえぎられたことがある。いちばん年かさの大將が、わたしの前に立ちふさがって、わたしの両手の手首をぐいとつかんだ。わたしはいやで、下を向いて目をパチパチさせてなにかんばかりの顔になっていると、三郎は、そこにあった大きな頭大の石を両手でさしあ

げて、わんぱく大将へ投げつけたのである。あたらないでさいわい、あたったらたいへんだった。わんぱく大将も、きもをけしてわたしをはなしてにげ、「やあい、兄きへかかると、弟がすけだちすらあー」と、あたりまえのことをはやしたててにげうせた。こんなときの三郎のたものしきさらなかった。

問1 「わたし」という書き手は、どんな性質の人ですか。

- (ア) いくじなしでなき虫 (イ) おくびょうで弱虫 (ウ) 弟おもいでゆうかん (エ) 気が小さくておとなしい

問2 「わたし」は三郎のことをどう思っていますか

- (ア) 落ちきつがなくてあわてものでこまると思っている (イ) ゆうかんでたのもしい弟だと思っている (ウ) おとなしくてかわいらしい

問3 作者はどんな気持でこの文章をかいたのでしょうか

- (ア) 少年時代をなつかしく思い出しながらかいている (イ) わんぱく達の大將に反感を感じながらかいている (ウ) 弟の幸福をいのりながらかいている

問4 三郎はどんな性質ですか

- (ア) おっちょこちょいであわてもの (イ) おちつきがない (ウ) 元気でわんぱく (エ) いじわるでなまいき

3. 4. 1 文全体の情意の読み取り、文中における主人公もしくは他の人物の感情把握など文自体のもつ感動性を適確に判断して主体的に読みを深める問題である。正答率は次に示す通りである。

付表第4 生活文読解における正答率(百分比)

出題意図	性別	渡 島		檜 山		近 郊		都 市		総 計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
問1 作者の性質を読み取る	男	37.5	51.6	43.8	50.3	51.2	45.1	60.0	59.5	48.1	50.3
	女	57.1		57.0		36.9		59.1		52.5	
問2 作者の弟に対する感情を読み取る	男	87.5	77.5	66.2	67.9	78.0	77.5	93.3	89.8	81.2	77.7
	女	64.3		69.6		76.7		86.3		74.2	
問3 文全体に流れる作者の情意の把握	男	62.5	51.6	58.8	54.7	53.7	47.9	53.3	44.8	57.1	48.8
	女	35.7		50.6		40.0		36.3		40.6	
問4 作者の弟の性質を判断する	男	87.5	83.9	73.7	68.5	82.9	81.7	80.0	83.1	81.0	78.1
	女	71.4		63.3		80.0		86.3		75.2	
総 計	男	68.7	62.9	60.6	60.3	66.7	62.5	71.7	68.1	66.9	63.3
	女	57.1		60.1		58.4		64.5		59.8	

問1は文中から作者の性質を読み取る問題であるが、50%の正答率を示している。問2、3に関しては、男子の正答率が圧倒的に女子を上回る。「文全体の情意の読み取り」「文中の主人公もしくは他の人物の感情把握」などつまり文章自体のもつ感動性については女子より男子の方がより冷静に判断できるのかもしれない。なお地域による格差はほとんど見られない。総体的に見て情意のよみ取り、判断などではあまり差がないように思われる。問3は50%台の正答率を示しているが問1と同じく児童の意図が強くあらわれたものであろう。問1の誤りの傾向では(ウ)「弟おもいでゆうかん」に○をつけた子どもが44.6%とかなり多いのだが、出題のねらいとはかなり違っているので注目されるところである。問3に対しては(イ)「わんぱく達の大將に反感を感じながらかいている」に○をつけたものが圧倒的に多く80%台を示している。読みの深さが足りないために起る問題であろうが、子どもは子どもなりに「わんぱく大将」に対する強い反撥を示した

結果の判断であるかも知れない。これはあくまで主体的な判断による特殊な誤りであるので、このような文章に対しては常に冷静な判断が必要となってくる。

3. 5 論説文の読解

討論の目的は決して自分の考えを他人におしつけることではなく、みんなが対等の発言権をもってそれぞれ意見を述べ合い、論議をつくして、できるだけいい結論にいきつくことである。一つの問題に対して、人はおのおの異なった見解をもつ。どの意見が正しいかは、話し合ってみなければならぬ。あるいは何を計画するにしても、人はそれぞれちがった立場にあって、利害を異にする場合がある。それをどう決めたら全体にとっていちばんつごうがよいかということも話し合ってみてはじめてわかるのである。こんな場合行なわれるのが討論である。

問1 この文章の終りの のところにもうひとつつけ加えたいと思います。つぎの中からよいものを選んで○をつけなさい。

- (ア) 討論こそ問題の解決策を見いだすためのもっとも民主的な方法である。
- (イ) このようにして討論は、多くの見解を結論と比べながら考えていこうとするのである。
- (ウ) 以上討論の目的は、利害や見解を平均化させていくことであるということが出来る。

3. 5. 1 例文は論説文であるが、文全体の内容をまとめるという形式のものである。段落のまとめ、内容の理解、語句の意味把握など総合的に理解能力を見ることができるという点で論説文の指導は極めて重要である。問題文にある内容は所謂前提条件の文であるが、これを結論づける後半の文を選定するわけである。問題文自体は理論整然としているので、さほど難解とは思われぬが、正答率は意外に低い。次にその結果を示す。

付表第5 論説文読解における正答率（百分比）

地域	渡 島	檜 山	近 郊	都 市	総 計
正	22.6	20.1	19.7	43.2	26.4
誤	77.4	79.9	80.3	56.8	73.6

全体の大意を把握するとか、主題の決定という問題であるならば、或程度理解もでき地域による格差もみられないのであるが、論説文ということになると、そうはいかない。つまり都市校が圧倒的に良いということであるが、これも正答率40%台では、近郊僻地に比較して良いということであって、総体的に見てはかなり低位である。正答率の低かったことは解答選択校の(イ)、(ウ)がおのおの「このように」「以上」という書き出しで、あだかも前文の結論付けを思わせるような書き振りであるので、これにまどわされたのかも知れぬ。いずれにしても一貫した論理の筋をたどるといことはかなりむずかしいことである。論説文における基本的構造、即ち前提と結論との関連づけを適確に把握する思考的訓練が必要にならう。地域の児童にとっては、今後この面の

思考陶冶が充分になされなければならないと思う。

3.6 語いの理解

3.6.1 国語教育は児童のもっている語いの内容を適確に理解し、その量を増すことを任務の一つとする。児童の語いに対する基本的考えは極めてあいまいで不確かなものである。昔の国語教育は語いの観念内容を明確にさせることを目的として正確な定義づけを要求した。現代の語い指導は生活経験主義的、行動主義的であり、場合によっては文体系的であり、典型的である。語いの持つニュアンスに敏感に反応でき、生活の中で意味するものを正しく確実にとらえることができなければ、理解ができたという根拠にならない。極端に言えば、定義よりも用法である。表によると生活経験の深さを要求する語い理解はその経験を深く積んだ者のみに理解され、好結果を示すという事態があらわれている。語いの理解だけは都市、僻地の格差がややあらわれているようである。「使用語い」と「理解語い」との差が都市と僻地とでかなり違うということは全体的な画一的な教育の場としてはできるだけ僻けねばならない。日常普通の社会生活において使用する語いは、平易な基本的なものとしてできれば画一的、共通的なものを早く選定して文化の継承、伝達、創造に役立てたいものである。参考のため語い理解における正誤答率を次に示す。

付表第6 A. 語いの理解における正誤答率（百分比）

正		答					誤		答				
語い	地域	渡島	檜山	近郊	都市	総計	誤りの選択技	地域	渡島	檜山	近郊	都市	総計
①	はかない	35.5	32.7	57.7	62.1	47.8	①	(ア)はげしさが足りない	45.0	28.9	40.0	42.8	39.1
②	手こずる	61.3	61.0	73.2	94.6	74.8		(イ)ふじゅうぶんである	55.0	56.1	60.0	50.0	55.2
③	経験	61.3	60.4	53.5	64.9	61.0		無記入	0	15.1	0	7.2	5.5
④	就任	31.9	43.0	49.3	54.1	44.5	②	(ア)手をこすり合せ	66.7	58.3	63.1	100.0	72.1
総計		47.4	49.2	58.4	69.0	56.8		(イ)手がいたくなる	33.3	31.7	36.9	0	45.4
								無記入	0	10.0	0	0	2.5
③							(ア)試験のために勉強する	33.3	36.5	51.5	76.9	49.5	
							(イ)これからやるうと計画すること	66.7	50.8	48.5	15.2	45.3	
							無記入	0	12.7	0	7.9	5.2	
④							(ア)仕事が見つかること	46.1	41.5	38.9	47.1	43.4	
							(イ)ある仕事の代表となること	53.8	49.1	55.6	23.5	45.5	
							無記入	0	9.4	5.5	29.4	11.1	

問題文の語いは①②日常用語的な平易なもの、③④はいわゆる教科書用語的なものをあげたのであるが、両者の間には結果的には余り差はでてこない。このことは日常用語的なものと学校用語的（教科書用語的）なものとの間には体験につながる解釈と、伝聞学習による記憶的把握とによる差はないと思われる。ただ今回の調査はごく限られた語いに止まったので適確なことは言えないがあるとするれば、読書経験的な理解などが語い把握の鍵となろう。語いに対する理解は地域間にかかなりの差がみられた。これらはとりもなおさず地域児童の経験差ともいえよう。経験差とは①読書による経験、②日常会話における経験、③マスコミを通しての生活経験などによるも

のであるが、これらは又児童の自主性、父母の教養度、友人の知性度、マスコミの選択などに関連づけられてくる問題でもある。

3. 6. 2 次に誤答表について一言述べてみたいが、①の「はかない」に対する誤りの選択枝、(イ)「ふじゅうぶんである」と答えたものが全体の5割強を占めている。(イ)は正答に似通った意味を含んでいどころもあるので、間違っただけが多いと思われる。(ア)(イ)(ウ)それぞれ似通ったような選択枝なので三者とも極端な差が出なかった。②「手こずる」に対しては、(ア)「手をこすり合わせる」が、70%を占めている。これは語いを表面だけ見て判断したもので、不注意のそしりはまぬがれない。③④は誤答には大した差は出てこなかった。これはむしろ漢字の読めなかったことであろうし、またやや難しい理解語いに属することばでもあるので充分考えず、いわばあてずっぽうで選んだ嫌いもあろう。

3. 6. 3 さて、次に「語い理解」について応用的な力を見るために短文をあげ、欠所個所に適当な語いを挿入する問題を課してみた。文脈関係をおさえる文法的な問題でもあるので例文を次に示してみよう。

つぎの文章の()の中にあてはまることばを、の中からえらんでその番号をかきなさい。

むさし野にもようやく春の^a()がきた。遠くにみえる“ちちぶ”の山の^b()もきえて、いのがしらのうめは^c()である。庭さきへ^d()が来てしきりにさえずってゆく。あたたかい^e()が大地からのぼってその中に^f()の黄色い花が^g()うかびあがっている。

① うぐいす ② おとずれ ③ あざやかに ④ すいじょう気
⑤ 満開 ⑥ 雪 ⑦ すいせん

正答率は次の通りである。

付表第7 B. 語いの読解における正答率(ことばのかかり方)(百分比)

地域別 正解数	地域					(a~g)	項目	地域				
	渡島	檜山	近郊	都市	総計			渡島	檜山	近郊	都市	総計
全問正解	35.5	49.6	38.0	45.9	42.0	各問における正答率	a	77.6	87.4	84.5	97.3	86.7
6問 "	0	4.4	1.3	5.4	2.7		b	83.9	85.5	93.0	94.6	89.2
5問 "	28.2	15.1	33.8	37.8	28.9		c	41.9	60.4	42.3	51.3	48.9
4問 "	9.7	11.9	11.3	5.4	9.5		d	90.3	84.3	84.5	94.6	88.4
3問 "	11.2	6.3	7.0	2.7	6.8		e	77.5	76.1	69.0	94.6	79.3
2問 "	4.2	8.8	2.8	2.7	4.6		f	74.2	77.4	87.3	83.8	80.7
1問 "	0	0.6	2.8	0	0.8		g	51.6	63.5	69.0	59.4	60.8
全問誤答	11.2	3.3	2.8	0	4.3							

全問正解の者が全地域を通じて40%前後の数字を示している。語いの意味を理解し、あわせて

文脈における位置づけを理解する問題としてはまずまずの出来と思う。用語をみても大体は体言を挿入するので割合理解しやすい文と思うが、修飾語が若干あるので注意を要するところでもある。5問から7問(全問)解答が約70%台を占めているところを見ると適語を挿入して短文をつくる能力、語句相互の連関、文脈関係をおさえる力も身につけて来ているものと思われる。各問の正答率を見てみると(c)の「満開」という語を挿入する個所が極めて悪い。この原因は意味の取り方が充分に出来なかったものと思われる。なお(c)の個所に選択枝(3)「あざやかに」を挿入したものが最も多かった。『うめは「あざやか」である』ならば意味が通るが「あざやかに」という形容動詞の連用形であってみればそうもいくまい。語いに対する解釈が適確になされていない証拠である。(g)の個所に挿した誤りの例は、⑤「満開」である。『黄色い花が「満開」うかびあがっている』では勿論文としても正しくはない事はわかり切っているが、途中の一部分を見て早急に判断してしまう唐突さがうかがわれるので留意すべき所であろう。

3.7 以上の結果を通して―

以上で問題別による結果を示してみたのであるが、全問題に対する地域別正答率を示してみると次のようになる。問題文は10に分けた。配点は計100点である。

付表第8 各問題に対する地区別平均点

問題別	満点	渡島	檜山	近郊	都市	総計	備考
問 (1)(2)(3)(4)	15	7.9	8.9	9.8	10.8	9.3	問 〔一〕 の (1) から (4) まで 主題、 段落 の問題
〔一〕 (5)	5	2.3	1.7	2.5	1.7	2.1	
問 〔二〕	7	5.1	5.3	5.2	5.7	5.3	
問 〔三〕	12	7.9	7.2	8.0	8.2	7.8	
問 〔四〕	5	1.0	1.0	1.0	2.1	1.2	
問 〔五〕	8	3.5	4.0	4.7	5.5	4.4	
問 〔六〕	12	8.0	8.2	7.9	8.1	8.1	
問 〔七〕	9	5.1	5.6	4.7	6.5	5.4	
問 〔八〕	12	7.2	6.5	7.0	6.8	6.8	
問 〔九〕	9	5.6	4.5	4.9	3.9	4.7	
問 〔十〕	6	4.9	4.7	4.7	5.3	4.9	
総計	100	58.5	56.6	60.4	64.6	60.0	

平均点の総計を比較してみると、都市64.6、近郊60.4で共に60点台を示しているが、渡島、檜山地方もそれにはやや劣るが、56.6を示して、まずまずの成績である。順序としては都市、近郊渡島、檜山となるが最高の都市、最低の檜山との差は僅々8点にしか過ぎない。都市、僻地の学力差は本問題に関する限り余り見られないということになる。問題種別、教材別、目標意図別にもっと精細に調査したならば或いは満足すべき結果が出て来るかも知れないが― それにしても、そう著しい差はあるまいと思う。これはむしろこの地方では、こと国語の学力に関する限り全般的に低下しており、マンネリズム的症状を呈して伸び悩んでいる。理由は道南地方のもつ特有の地域的、環境的、文化的要因のせいであろう。作品読解においては意味的機能、情緒的機能がことばに対する敏感な作意反応によって、益々はっきりと確かに感じ取られるのであるが、感受性

の少ない、当地方の子供にとってはなかなかむずかしい事であろう。読解と鑑賞は相互に切りはなすことができない。文学作品であろうと説明文の教材であろうと知的操作としての読解と情的操作の鑑賞との二面が揃わなくては、確実な力とは成り得ない。文読解では知的作用としての読解を契機としてその活動を發揮し、情緒的反応に童心の焦点を充てつつ批判鑑賞の世界に入り込む主体的把握が極めて大切である。そういう点ではこの地方の子供が果して主体的把握を円滑に行なえる環境にあるかどうか、問題を發展させて読書生活環境学習生活環境を通してその物的条件を追及してみようと思う。

§ 4 読書生活環境

4.1 環境的要因を求めたのはあくまで地域差究明の一資料であって、国語学力の全般的究明から見ればむしろ間接的な面が多いのであるが、極めて重大な関係があるので検討させていただく。上記の学力の実態から見て都市と僻地とは平均点において約10点の開きがあった。こんなところに都市と僻地とは環境的面の要素が強く働いているかも知れない。この環境的面には学校の基定条件、部落の状況、父兄の状況、児童の学習状況などもろもろの要因がでてこよう。

4.2 読書生活面について一

国語学力と卑近な関係をもつものは読書生活要因である。不断教科書で学ぶ面は往々機械的な要素に止まってしまう。常に広く、深く本に接して幅広い視野、高い識見を保っておくことが国語学力殊に読解力をつけることに大いに役立つ。当地方の児童達の読書生活はどのような実態であるのか。アンケート式に問題を提示して調査したものがあるので紹介してみたい。問題は①読書に対する意慾 ②本を読んだ場合の処理 ③本をえらぶ基準および態度 ④父母の読書に対する関心度 ⑤読書生活の場 ⑥新聞に対する関心度 ⑦読書傾向、および領域 ⑧本に対する価値意識等であるが、以下順次に述べてみよう。

4.2.1 テレビ、ラジオの普及が読書意慾を低下せしめた事は否めない事実である。簡単にいつでも何処でも楽しむことのできるテレビ、ラジオは子供にとって関心の的である。僻地の部落どこでも各戸で、できるだけテレビを備えつけるといった現状では、始終テレビにかじり付く児童はかなり多い。テレビの普及度はわれわれの調査では都市で95%、僻地で78%であった。僻地の78%はそれでも最近数年間で急激にふえた実数である。経済的な理由よりも、むしろ封建的隷屬意識のつよい部落においては本家、別家の関係でつけたくても付け得ぬ家庭が多いという。テレビの普及していない地方では依然として書物に対する興味は強いようだが、興味はあっても実状では書物に接することが極めて少ないのが僻地の特色である。一般に男子よりも女子の方が書物に対する関心度は高い。桧山の僻地では本を読みたくてもよむ暇がないという。家事の手伝いなどで稼働時間が多くて本を読むことが一種の精神的苦痛にさえなっているらしい。ただし書物を読みたい、本に対する関心度、意慾の度合いは僻地児童の方が都市の児童に比べて高いという結果がでた。これには次のような理由づけもあったようである。都市校に比べて僻地校は書物が少ないため書物に対する関心度が異常に高かったということである。

書物を誰から借りるかの問に対して友達からというのが圧倒的でその次が学校となっている。近郊では学校図書館というのが大部分で友達からというのはその次になっている。僻地での図書館整備がいそがれる理由でもあろう。結果から見て僻地の児童の常に接する書物は漫画、雑誌、週刊紙などの通俗物で高度な文学書、物語、童話類などは読みたくとも読めない実状でその点では国語学習にはむしろマイナスの面が多く出て来ているようである。書物の選択にしても面白そ

うだから自分でえらぶという子供が大半で約60%の率を示している。分量、時間なども計画性がない。書物を通して教師と児童とが話し合う場が極めて少ない。書物をよんだあとの爾後処理も徹底していないようである。特に読書ノートをつけたり、感想文を書いたりという子供が全体を通じて渡島の男7.6%、女11.1%、松山男7.3%女7.3%、近郊男8.3%女17.2%、都市男5%女9.1%と極めて低率で、処理のない子供が僻地都市を通じて30%から60%を占めている。また書物についてわからない個所は飛ばして読むとか、読みっぱなしというのが圧倒的に多く先生にたずねるとか、自分で調べるといのがほとんどない。読書を通して先生と児童の結びつきのないのが遺憾である。案外読書指導の面がおろそかにされているのではないか、読書技術、図書整備など今後の読書指導の在り方を充分検討する必要がある。

4. 2. 2 図書および図書室の整備は目下の急務であるようだ。図書室、学級文庫などのない学校が調査校中6校もあったし、かりに本が若干あっても職員室、校長室の一隅、廊下の片隅にあたりして充分ではない。学級文庫・図書室の整備は早急に為されるべきである。僻地校において読書指導を特に取り上げて指導している学校というのは松山で1校のみであった。また父兄の読書に対する関心度も極めて低い。上記のように家事の手伝いのため本を読む時間の少ないこともその例であるが、渡島、松山では本を読むということと学校の勉強ということがあだかも別の物という考えがあるようである。「教科書以外の本を読んでいる時家の人はどんなことをいいますか。」という問に対して「本を読んでいないで勉強しなさい。」という親が渡島では20%、近郊で12~14%、都市では20%もあるという。総じて学校の勉強には関心を示すが教科外の指導、家庭内での指導には余り熱意を示していない。学校においても教科書指導のみに重点をおいている現状ではこれに見合う国語学力の機械的な面のみが養成され、創造的、独創的、応用的、発展的な能力の養成には成り得ない。系統的な読書指導が計画されなければならぬ、読書指導に時間を充てたいという学校も中にはあるが、概ねは時間の不足をカバーするに汲々として読書指導には手がまわりかねるといのが現状であるらしい。

4. 2. 3 読書傾向、読書領域では漫画、童話に集中されるようである。都市では漫画男69%女50%で一番多く、次ぎは童話男47%女37%、3位は図鑑類男26%女29%、その他雑誌となっている。近郊では漫画男60%女48%、童話男60%女52%、雑誌男27%となっており、渡島地区では漫画男53%女58%、童話男59%女55%、松山地区では漫画男68%女57%、童話男46%女38%となっており、漫画は常に最高位を占めているようである。又新聞の購読欄調査でも漫画はかなり多い。次に示すのはその結果である。

付表第9 新聞主要購読欄調査一覧表

項目	地 域		渡 島		檜 山		近 郊		都 市	
	男	女	男	女	男	女	男	女		
1 漫画、絵、写真類	61.5	33.3	42.9	72.0	41.1	75.8	48.9	54.5		
2 広告映画欄		11.1	11.7	11.5	19.4	10.3	32.5	27.3		
3 スポーツ欄	53.8	11.6	50.5	8.7	52.7	10.3	66.7	9.1		
4 子供欄	7.7	44.4	20.5	24.6	11.1	31.0	20.0	27.3		
5 ラジオ・テレビ放送番組欄	53.8	72.2	61.7	50.0	36.1	62.0	80.0	86.4		
6 家庭欄		5.6	2.9	8.7	5.5	13.7		9.1		

渡島・檜山地区小学校児童の国語読解力の実態と問題点

項目	地域		檜山		近郊		都市	
	渡島	島	男	女	男	女	男	女
7 演芸娯楽欄			7.3	1.4	2.7			9.1
8 学芸欄			1.4	1.4		3.4	8.9	
9 社会記事欄	53.8	16.7	19.1	7.3	33.3	6.8		18.1
10 政治外交欄	7.7		2.9	1.4	11.1			
11 小説欄			1.4	2.8	8.3		8.9	
12 社説欄	1.5		1.4		2.7		2.5	
備考	空欄記入なし							

大半は漫画や放送番組に集中しているようである。テレビや漫画に興味のある児童をいかに指導するかは今後の国語教育における極めて重要な問題でもあるが、それよりもましてもっと適確な読書指導体系を考うべきであろう。図書館の整備，蔵書類の質的向上，量的拡大など早急に検討すべき問題が極めて多い。現在の読書指導は教科指導と並行した極めて小規模なものであってさして効果はあげ得ない。現在ではあまりにも教科書学習に集中している嫌いがある。勿論教科書学習は基本的なもので、基礎的知識技能、態度を直接のねらいとして特定の教材、時間、場で一斉、画一的に指導され効果は大いに期待できるがより自由な立場で、より自由な時間で、より広々とした環境で児童自身の興味と必要と欲求によって読み物が選択され、創造的に発展的に営まれる読書の効果を大いに期待したいものである。国語能力——①読みの興味、②読みの速度③語い力、④読解力、⑤鑑賞力、⑥創造力の飛躍的増大を大いに期待したい。読解指導と読書指導は両々相まって国語学力を形成し、人間育成に培うものなのである。

§ 5 国 語 学 習 環 境

国語学習時間の不足に対する悩みは、全般的に見てかなりあったようだ。小学校6年生において最低授業時数245ぎりぎりの線で行なわれているものが、渡島1、桧山4校で報告されている。時間数の不足は学校行事やその他の事でくい込まれるらしいが、問題は複式、複々式における学級編成である。授業時数が仮に正規に組み込まれても教師の直接指導が限られてしまう現状では実質的な学力低下はまぬかれない。現場の学校では国語科に対する研究態勢が必ずしも充分でない。研究主題もあまり明確ではない。読解力、鑑賞力、作文による創作力など若干の学校では研究目標、研究主題を設定しているようだが、実績はあまり上っていないようである。教科指導の為の指導主事の来訪もあまり期待できないようでもある。もちろん多少の研究集会、授業研究、テスト、測定などは随時行なわれているらしいが、数が限られている。教科書、教材研究などにも問題があるようである。文学的教材を出来るだけたくさん子供に与えて鑑賞力、創作力をつけようとしても感受性に乏しい僻地の子供にはなかなか困難であるようだ。指導領域についても問題が多い。情緒表現の教材、思索追求の教材ではほとんどの学校が指導困難を訴えている。児童の経験的視野の狭いこと、思索追求に充分時間がかけられないこと、情感の単純なことなどが現場教師のなやみでもあるようだ。アンケートに対する解答にもその点がよくあらわれている。例えば感情表現の文学教材指導の問題点として、①感じ方、考え方が練れていない、②喜び

驚きなどの感情表現がない。③心情描写などの精神的、内面的理解ができない。④鑑賞、創作の指導まで手が廻らないなどの問題があるようである。思索追求の教材に対しては①ことばとことばの連絡関係、文章自体の論理的関係を把握する力がないため、語い力の不足と相まって致命的な欠陥を露呈する。②このような教材に対し最初から興味、関心が少いし、従って理解も浅い。③生活経験が狭く、書物に親しむ時間もないので、把握内容は幼稚で、雑ばくで単純である。また演劇的教材に対しても①情緒そのものが豊かでないため感情表現が充分にできない。②本読み立稽古、本番などの演出効果を期待する、指導の余裕も、時間の余裕もない。言語的教材に対しても理論的把握文法的把握が充分できず興味がうすいという悩みを訴えている。一方教師自身の問題としても指導時間の不足や教材研究の不備や資料、教具の不足、指導技術の未熟さなどを反省している。それらのことが陰に陽に児童の国語に対する好悪の念、国語学習領域における難易の度を決定する。そういう点について調査があるので次に示してみよう。

付表第 10 A. 国語学習に対する好き嫌いの度合

項目	地域		渡 島		檜 山		近 郊		都 市		備考
	男	女	男	女	男	女	男	女			
1 好 き	28.0	38.0	23.0	33.0	17.0	41.0	20.0	55.0	空欄は記入なし		
2 普 通	43.0	52.0	69.0	50.0	44.0	39.0	40.0	32.0			
3 嫌 い	16.4	4.0		17.0	17.0	3.0	9.0	5.0			
4 わからない	4.0	6.0			14.0	17.0	13.0	14.0			

B. 国語学習領域に対する好き嫌いの度合

項目	地 域		渡 島		檜 山		近 郊		都 市		備考					
	学 習 領 域		男		女		男		女							
	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×						
1 字の練習	46	23	56	22	37	24	51	10	44	19	48	10	20	33	41	32
2 教科書の読み	69	8	50	28	41	18	43	9	56	6	62	10	60	20	55	14
3 作 文	0	69	28	50	10	50	10	55	6	31	3	6	9	60	14	73
4 習 字	31	8	17	39	32	7	22	13	17	14	14	10	20	20	23	14
5 ことば集め	0	39	11	33	1	15	8	24	14	25	3	4		33	5	23
6 漢字・文の書取り	23	23	33	11	10	15	20	14	14	8	7	7	20	29	27	14
7 創作(詩,小説,物語,童話)	0	39	0	28	10	24	12	28	8	8	14	39	13	33	32	41
8 ことばの意味調べ	23	15	44	22	24	19	20	12	28	8	8	14	40	9	27	23
9 お話を聞く	31	0	39	6	35	6	38	6	41	6	31	3	53		36	5
10 お話をする	23	0	0	11	4	16	7	14	6	6	10	10	13	13	5	23
11 新聞, 文集を作る	0	0	6	6	12	16	1	14	3	22		35	13		18	23
12 ことばの規則の練習(文法)	0	23	0	6		4		4	3	11		14	9	13		27
13 テープレコーダーを使う授業	8	8	11	0	3		7	6	11	6	21	3	9	9	5	9

1. ○好き, ×嫌い, 空欄は記入なし

2. 数字は百分比

各地域共女子の方が男子よりも好きと答える者が、圧倒的に多い。国語科が情操的教科といわれるだけあって、感授性の強い女子に支持されているようである。また字の練習や教科書の読みに対しては大した抵抗を感じていないが、作文殊に詩、小説、物語、童話の創作領域に対しては好悪の差が甚だしい。これらは文法学習と共に子供にとっては最も苦手のものであろう。お話を聞く、お話をするのはいわゆる聞く、話すの学習領域であり、僻地では指導困難を感じている領域でもあるが、子供に取っては話すことはともかくとして聞くことにはさして苦痛を感じていないようである。但し聞く態度と聞き取る内容は必ずしも一致するものでもない。さて以上学習指導その他で実際に行なわれている国語科の現状を見たわけであるが、まだまだ検討すべき余地がかなりある。一般に学習内容で問題になることは読解と作文であろうが、読む書くの根本原理が僻地では確立されていない。極めて重要な問題ではあるが、一また視聴覚教育が極めて遅れている。子供の実態調査でテープレコーダーを使う授業があまり行なわれていないことを知った。どの学校でも使用目的に応じて視聴覚教具を取り入れようとする熱意はあるようだが、活用度にむらがあるようだ。例えば理科、社会科、音楽科などではよく利用されているようだが、国語科に関してはあまり活用されていないのではないかと、テレビ、ラジオ、テープレコーダーその他の視聴覚教具を大いに活用して授業の運営をスムーズにする事は大切である。反覆練習の為に使うのもよいし、教師の直接指導の足りない部分を補う意味で利用するのもよいし、とに角視聴覚に訴えて国語学習を効果あらしめるよう大いに工夫してほしいものである。

§ 6 お わ り に

以上でこの地区における読解能力および学習環境の実態を考察してきたのであるが、はじめに述べたように僻地における読解能力を都市のそれと比較して考察することになった。しかし調査の結果は学力の差のあるのはごく一部の限られた分野にとどまり、全体としては大差のあるものではなかった。地域による能力の差よりもむしろ教材群のちがひ、目的領域別の違いによるものが多かった。抑々読解力というものとはままとまった意味をあらわすように配列された文字群を、意識を集中してたどりことばの連りとして定置する力でその意味では心理的、頭腦的な働きである。従って表現を通して内容を敏感に察知する幅広い視野と豊富な体験であり、具体的には文字や音声、内容理解鑑賞、批判や感想発表、情緒表現となってあらわれてくる。当地方の児童には残念ながらこれ等総合的国語読解力の根本たる思考陶冶、情感育成の面が足りないので満足すべき結果は得られなかった。結果の集計については既に色々の教材群を通してその都度考察してきたがこれは当初われわれが予想して来たところで、今更問題にはならないが道南地方は他教科はいざ知らず国語学力に関する限りかなり低い。比較的僻地校の多いことも懸念した一因であったが地勢的、地域的な悪条件が重なっている所で、これは止むを得ない事である。只今後とも複雑多岐なマスコミの機構の中であって、新しい社会の趨勢に敏感に順応して行くためには何としても国語学力、言語能力の充実が要請される。僻地の子供は感情表現に乏しいといわれるが、これはとりもなおさず、思考力の欠如を意味する。今後の問題としても思考追求の教材、情感育成の教材を大幅に取上げ重点的、計画的に指導する必要がある。さらにまた学習環境の整備殊に読書指導の場の充実が目下の急務であろう。これらは豊富な体験に裏付けされた内面描写、経験描写ともなり、記述表現一作文の力をも充実することにもなる。読解と作文は国語能力の重要な二面でもある。「経験を高め、知識を増し、情報を求め、楽しみを得る」ことが読書の主要な任務であり、またこの事が人間形成に大きく影響する事も併せて考えたいものである。読解力、学習環

境の実態を調査するのあまり指導法の実際にふれられなかった事は遺憾であるが、後日の機会にゆずることにして気付いた点を若干のべてみたい。①指導に当っては読解内容の範囲、程度を明確に示して抽象的な読みでなく、目的的な読みの意義を確立すること。②読解の為には経験的に文章を読ませる場面を考慮すること、このためには学級文庫、学校図書館を整備充実し、場面の拡大を計ること。③ことばによる語感の育成は特に大切である。ことばの持つ意味的機能と情緒的機能との切点の上に立って文脈をたどり、内容を把握し、ことばの持つニュアンス正しく識別し、確保する言語に対する鋭い批判眼鑑賞眼を養うことが特に重要である。

以上指導面の考察が粗略になった事は、紙数の関係もあり止むを得ない。今後この面の検討を進めたいと思っている。本調査は実態を中心として行なったもので、引用文献も少なく、また繁雑を避ける為に敢えて文献をあげないが、実態調査では、新潟県立教育研究所編研究紀要第14集「国語科学習指導の実態と改善点」また、読解力および学習指導では、明治図書興水実編「国語指導法事典」は特に参考にさせていただいた。併せて感謝の意を表したい。